

もの言わぬ案内人

老人ホーム任運荘、ある日の宿直。深夜巡回中、老婦人が叫びをあげて廊下に跳び出し、「息子が外で殺されているっ、助けて下さいっ」。私は「わかった」と言つて外の闇に出、しばらくうかがうふりをする。それから「何もありません。息子さんはきつと家で寝ていますよ」となだめる。

「まあ、そうでしょうか」。彼女は安心したようにベッドに上がり、私に合掌する。私もあわてて合掌をお返しする。

彼女は母ひとり子ひとりの暮らし。七十をすぎた息子では心を重く病む母の世話ができず、ここに移ってきた。しかし、ホームに来てからの家恋しさの徘徊騒ぎは昼夜を問わず激しい。ある日、相貌変わりをはた彼女に寮母は試みた。ジュース缶をさし出し、「これね、あなたの息子さんからお母さんへあげてと送ってきたものですよ」と手を握る。

「まあ。ほんにあの子は孝行者ですから」と、にっこり。初めての笑顔であった。

そうしたくり返しが功を奏し、いまは「息子からの来ていませんか」と、寮母室を訪れる日々となっている。「今着いたところですよ」と、寮母は親心に沿う返事を真顔でする。

もうひとりの老女は体は不自由だが、手の届くものはどんな異物でも口にする。何もないと着物をほだいて食べ出す。相談員は思いついた。リングを小さく切って次々に出しておくことを。果たして、リングがある間はもう異物を口にしない。「リングとゴミとどちらがおいしいですか」と問うと、「そりゃー、リングじゃわえ」。

心や体を病むお年よりを前に、私たちはしばしば悲しく深く立ち迷う。しかし、まれに気付くことがある。お年よりの行動が無言のままお世話の真の方法を示していることを。「お年よりがお世話の最高の案内人」——寮母たちはようやくそう理解するようになった。

(一九八七年九月十五日)